

仲木貞一著
|| その遺跡を探る ||

10 Sen

版房書座金

特255
349

349
25



始



349

油 日本 人 ト

は

なり？

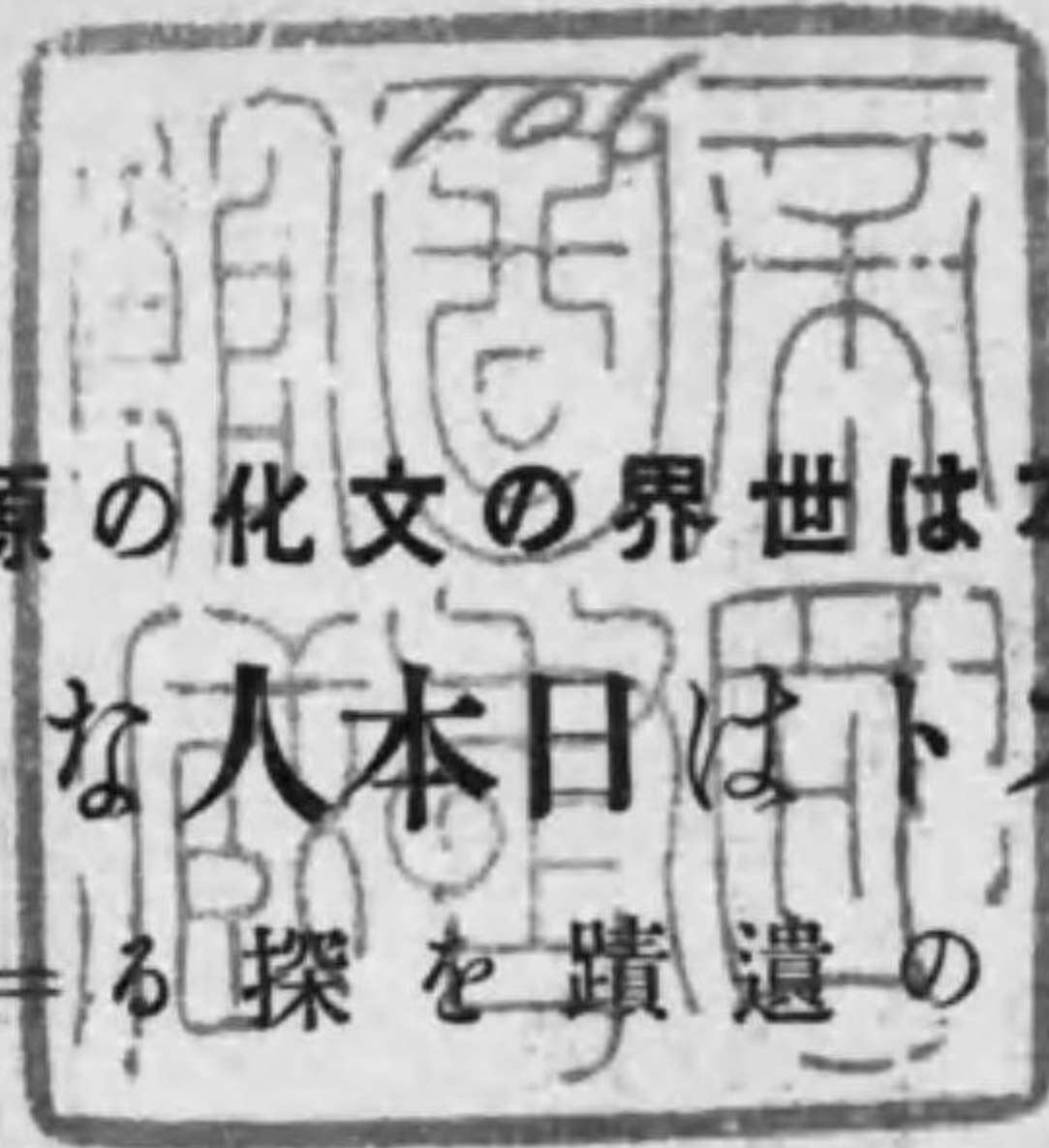
版房書座

|| その遺跡を探る ||

仲木貞一著



特 255
349



源の化文の界世は本日

？りな大本日はトスリキ

—る探を蹟遺のそ—

次 目

- 一、突然外國の新聞記事……………(二)
- 一、キリストの墓の在所……………(三)
- 一、キリストの館跡……………(四)
- 一、ピラミットの石山……………(五)
- 一、キリストの後裔の家……………(六)
- 一、キリストの上陸地點……………(七)
- 一、猶太式の風俗習慣……………(八)
- 一、エデンの花園と文字石……………(九)
- 一、盆踊りの唄と意味……………(一〇)
- 一、靈界から基督の聲……………(一一)
- 一、事の眞偽に就て……………(一二)
- 一、この問題の解決は？……………(一三)



るけ於に本日 品作回二第

る探を蹟遺のトスリキ

(成完日近)



平ヶ達・蹟遺

キリストの
後裔と
云はれる
山口氏

探索十・蹟のトスリキ

第一回作品

「燈臺の話」

(完成)

中



第三回作品

「無駄の話」

第一篇製作中

第四回作品

「ゴミから貯金」

第一篇製作中

會協畫映化文策國

四ノ五西座銀・橋京・京・東
番六二二七(57)座銀話電

キリストは日本人なり？の遺蹟を探る

——日本は全世界の文化の源なり——

仲木貞一著

突然外國の新聞記事

昨昭和十三年十一月二十二日の紐育新聞紙上には、驚く可き記事が載つてゐた。

それは、イエス・キリストが、日本に来て、日本で死んだ——その墓は、青森縣の片田舎にあると云つて、その墓の寫眞迄も添えてあつたことだ。

所で、この米國新聞の記事は、一紐育紙のみでなく、全米に亘り、凡ゆる新聞に載せられてあつたさうである。更に種々調べて見ると、それより以前に、日本の主なる新聞の地方版や雑誌等にもその事が載せられてあつたのだ、そ云ふし、山根菊子女史は、キリスト渡來説計りでなく、

モーゼも釋迦も、皆日本に来て、そして、日本で死んだのだ、と云ふ事を記した特別の著書「光りは東方より」と云ふ物迄も著はしてあると云ふ事を、後になつて知つた次第である。

我々は、單にこの事に興味を持つたと云ふ計りでなく、何故キリストが日本に來なければならなかつたか？ と云ふ事を調べて見る事も、無駄な事ではない、とさう思つて、同志數名と、その墓のあると云ふ場所に調査に赴くと同時に、出來得べくんば、これを映畫に收めて、普く世間に知らせたい、と思つた次第である。

綠葉香る五月半ばに、東京を立つて、麥の穂の青々した田畑を眺めつゝ、北へくと進んで行つた。

キリストの墓の在所

東北本線の青森の手前尻内と云ふ所から、ガソリン・カーに乗り換へて、四十分にして五戸と云ふ小さな町に着いた。其所から、バスに乗つて十和田湖に向ふ山路を約三十分も行くと、右手の小高い樹の茂つた丘の麓に、基督墓所入口と記された白ベンキ塗りの棒杭が立つてゐる。

爪先き上りに二十間も雜木林の中を入つて行くと、稍平らな丘の上に出る。左手の熊笹の茂み

の中に澤口家代々の墓と云ふ大きな墓石が立つてゐて、その周圍に、小さな墓石が十位も並んでゐる。その眞向ひに三間程の小高い丘があつて、まんぢう形の土が二つ丸くふくらんでゐる。向つて右に「十來塚」左に「十代墓塚」と記された十尺餘りの栗の木の棒が立つてゐて、その周圍に、極く簡単な木柵が廻らしてあるが、それは、もう朽ちはて、手で觸るとくづれさうだ。その、右手の方の「十來塚」と云ふのは、キリストの骨を埋めた墓であり、左手の「十代塚」と云ふのは、聖母マリア及びキリストの弟イスキリの髪の毛と耳とが埋められてゐるのだと云ふ。尙この二つの塚の間に、小さな土まんぢうが一つ坐つてゐるが、それは、何の塚だか分らない、と云ふ。

キリストの館跡

この塚のある丘と相並んで、西の方に同じ程の高さの丘が、西の方に長々と續く。數段歩程の平地は麥畑に耕されて、芽がやうやく出かゝつてゐる。その先の西方に同じ程の面積の地面は一面林檎畑になつてゐて、白い花が今を盛りと咲き亂れてゐる。この麥畑と林檎畑とは、キリストの館跡になるのだと云ふ。その館跡と云はれる所から發掘された、猶太民族に特有の水瓶と、

石製の供物臺とが、戸來村の役場に藏はれてゐるのを見せられて、成程、大昔猶太人が此所に來て住んだ事は、間違ひない事實だな、と思つたことである。

ピラミットの石山

さて、其所から墓の山を降つて、西の方に進み、山々の谷間を次第／＼に登つて行くと、急流が溶々と左右の岩石にしぶきを立て、流れてゐる。その上に架せられた危なかしい丸木を渡つて對岸に渡り、其所から松の落葉で靴の滑る急坂を、雜木や蔓につかまつて數丁も登つて行くと、突然其所に數十尺もある大きな岩石の積み重ねられた所に出る。五十疊敷き位ある扁平な大石がこの巨岩群から離れて、通路を阻んでゐる。これは、先年の大雨に倒れたものだ云ふ。

この巨石群の上の一個所に四角な十尺位の石が三個並んでゐる。それは、東西南北の方位を正しく指してゐるのだと云ふ。土地の者は、この巨石群の上にお石神と云ふ小さな祠を乗せて祭つてゐる。さて、この巨石群は、この附近には絶対に見られない石であるから、何所からか、わざわざ運んで來て積み重ねたものに違ひないと、土地の人は云ふ。もしさうだとすれば、これらの巨大な石を、如何にして此所に運び來つたか？そして、如何にして重ね合はせたか？一寸想

像もつかない。

とに角、かうして高い山の上に、わざわざ他から巨石を運んで来て、そして、これらを積み重ねて、その上で天なり神なりを祭つたと云ふ、土地の人が呼んでピラミットと云ふこの石の山は此所計りでなく、全国各地にもあるのだ、と云ふ。

而して、彼の埃及のピラミットも亦これと同じ目的で作られたものであるが、ナイル河畔の底地に高き祭壇を作る爲には、あのやうな多くの石を、あのやうに高く積み重ねなければならなかつた、と云ふ話し。更に埃及のそれは、年代に於て日本よりも新しい、と云ふやうな話しも聞かされた。更に又ピラミットと云ふ名前は、埃及語ではなく、天日人を照す天人合一を意味する純然たる日本の太古語だ、と聞かされると、何だか、狐につまづれたやうな氣になつて来た。

キリストの後裔の家

このピラミットを下つて、元来た路を引返すと、再びキリストの墓のある野月山の前に出た。その丘の前の田甫の中に、三軒の墓葬家が建つてゐる。この三軒の家こそキリストの後裔と土地の人々が云つてゐる所の澤口一家の一族なのだ。その眞中の一番大きな家が、本家の澤口家だ。

南の田に面した長方形のこの家の右寄りの臺所の入口から中を覗いて見ると、右手の東の方一面の土間には藁が敷いてあつて、一本の本の棒を境に、牛と馬とが、おとなしく草をはんでゐる。鎌をかついでひよつこり偉大なる一老爺が野良の方から、やつて来た。これが、キリストの後裔と稱せられる澤口家の老父房松翁である。七十幾才とか云ふが、まだ中々かくしやくたるものだ。成程、日本人離れのした堂々とした顔立ち、目鼻の立派さである。小坂村長は、この老人の前につか／＼と進み出て、「お前さんは、豫て開けたら眼が潰れると云はれる秘密な物の入つてゐる箱が、祖先から代々傳はつてゐると云つてゐるが、今それを出して見せてはくれないか？」と云ふ意味の言葉を、分りにくい土地の言葉で老人に持ちかけたが、老人は首を振つて、「そんな物はありません！」と、全然その事を否認するやうな返事をした。村長さんは「この節は、かうして全然そんな物は無い、と云ふやうになつた。困つたものだ」と、つく／＼困つたやうな顔つきで話した。

この秘密の箱に就いては、その數日後に、青森縣廳から、義勇軍の作業を巡視の歸途、わざわざキリストの墓を、視察に見えた經濟部長の手島傳氏も、その箱を開けさせれば、萬事は解決するのだから、と云つて、村長さんにそれを頼んで見たが、矢張り駄目だつた。何とかして、その

箱を出させる方法はないものか、と手島部長は可なり考へておられたやうだつた。

さて、箱の件は駄目になつたとして、村長さんは、二千年來の太木の切株があるから、それを見ませう、と云つて裏の方に案内してくれた。建物の東の方の緬羊小舎の先の畑の中に杉の木立ちがある。鹿島神社を祠つた小さな社があつて、その後ろに徑一尺位の杉の木や竹が數十本生へてるこんもり茂つた森がある。それらは、徑二間に餘る大きな木の切株の中から生へてるのだ。即ちこの二間計りの切株の跡が、二千年位経た古木の名残りなのだ。村長の訊ねるまゝに、房松老の語る所に依ると、今から丁度四十年程以前に、當時一段歩一圓しかしない土地を購ふ爲に、たまく、虫の喰つたその太木を、切倒して、七十圓に賣り拂ひ、その金で七丁歩の田地を手に入れ、今日の富裕なる身分になることが出来たのだ、と物語つた。そして、その木が二千年を経過したと云ふことは、その木を割つて作つた鹿島神社の屋根板の年輪を數へて行くと、その年數が數へられるのだと云ふ話だつた。

キリストの上陸地點

翌日は、キリストの上陸地點だと云はれる八戸港に赴くことにした。

尻内から八戸に赴いて、其所から自動車で、松ヶ崎と云ふ海岸に田甫路を走るのだつた。

今は、松の樹をあらかた切り倒して、小さな松の木しか生へてゐない、田甫につつと突出てる山續きの岬の先きの方に、お二月様と呼ばれる小さな社がある。其所が矢張りキリストを祠つてある所だと云ふ。お二月様と云ふのは、二月二十六日にキリストが此の地に上陸したからだと云ふ。尙この附近に海倉神社と云ふのがあつたが、其所には時間の都合で行かなかつた。

猶太式の風俗習慣

この八戸港から青森縣を横斷して、十和田湖の畔を南方に添つて秋田に抜ける一線には、他國に見出されぬ異風を昔から持つてゐると聞かされたので、よく見ると成程著しい特色のあるものを、八戸港からキリストの墓のある戸來村にかけて、はつきりと見出すことが出来た。

その異風とは、中央亞細亞又は南歐の女のそれに見るやうな、布を持つて顔を包む習慣である。甚しいのは、左右の目計り出して、顔を全部包んでしまふのがある。その四角い布は、若い女は赤又は桃色、老婆は黒又は紺色で、その他様々の色氣の布を、年に應じて田畑に働く者と行商する女とは必ず被ることである。男の深編笠も、稍古風な形に見受けられた。

土地が寒冷であるが故に、かうして顔を包むのだ、と云はれてもゐるが、夏の暑い日にも決してそれを取去る事のないのは、西洋のそれと同様である。

最一つ扮装の上では、女は腰布を必ず巻きつけて、後ろの方で縛つてあることだ。西洋のスカートと似た形の物である。

更に最つと普通の日本人と違ふことは、骨格や顔の形、鼻の高いこと、皮膚の白く美しく、年をとると赤味を帯びて來ることは、西洋人と頗る似てゐる。キリストの後裔と云はれる澤口翁の頭の毛が逆様に生へてゐるの等は、全く日本人には見られぬ現象である。と戸來村の村長さんの説明であつた。尙昔は、小學教育の行き渡る前までは、動詞を名詞よりも前に云ふ風習があつたとのことだ。即ち純粹の日本語法ではなかつたのだ。

尙又十和田湖から以西の、所謂舊津輕領に屬する日本海に面した方面の人々は、同じく色白で美しい顔形をしてゐるが、然し、十和田湖以東の舊南部領に屬する太平洋岸に居住する、戸來村を中心とする人達とは、その性質の上で、智能の上で、大に異なる所があつて、日本海沿岸の方の者は西洋人の血統を引いてゐるが、東方太平洋に面した地方に住む人々は、猶太民族に屬するものだ、とその後土地の物知りに教へられて、成程同じ外國種でも、さうした違ひを持つもの

か、とやうやく氣がついたのである。

尙猶太に屬する戸來村を中心としての人々は、赤子の生れた時には、その額に紅を持つて十字を描くこと、産衣の背中に猶太の紋章を縫ひつけること、死者を納める棺には、墨を以つて十字を記すこと、綿で作つた昔の手毬には、糸で猶太の紋章を縫ひつけること、地粉煎餅と稱せられる麥粉を原料として作られるビスケットを思はせるやうな香ばしい煎餅には、矢張り猶太の紋章が附いてゐること等々は、特に注意を要すると教へられた。

但し、この土地の此等の人々は、決してヤソ教も猶太教も奉じてはゐない。彼等は全部忠實なる佛教徒である。それが何時からさうなつたのか、誰もそれは知らない。只昔からさうなのだと云ふのである。

彼の基督の館跡から發掘されたと云ふ村役場所蔵の土器石器が、猶太民族特有の物だと云ふがかうした種類の物は、爾來田を耕す際に、又は路を切開く際に、幾らでも出て來たのだが、百姓達は薄汚い物だ、と云つて、鐵で叩き壊してゐたと云ふ。それが、由緒ある物だと知れてから、各々それを尊長するやうになり、金銭で賣買されるやうになつたと云ふ。今後は此等の物は、これを戸來村及び五戸町の役場に蒐集しておかう、との議があると物語られた。

又古來父の事をアダ、母の事をアバと呼ばれる慣習になつてゐると云ふ。彼のアダムとイブを思はせる言葉だと云つたら、そのアダムとイブの住んでゐたエデンの花園も、程遠からぬ所にあると云ふ話しになつて來た。

エデンの花園と文字石

そのエデンの花園と云ふ所は、此所から十和田湖に赴く途中の、大森林に圍まれた一大高原地の迷ヶ平（眉が臺とも云ふところ）がそれなのだ、と云ふ。今はまだ途中に雪が深く、乗合自動車は通はぬこの事だつた。

エデンとは、濕地を意味するエデから來てゐることだが、とにかく、西洋のバイブルに傳へられる地勢地形から四つの川の配置から、例の智慧の實に適合する所の、美味くてホルモン劑を多量に含む所のココと稱せられる特殊の木の實がなつてゐること、夢心地になるやうな美しい草花が見渡す限り瞭爛と咲き亂れ、青苔が敷つめて、薫風あたりを立ちこめると云ふ話なのである。

只彼のバイブル中のエデンは、人間の始祖が裸體でゐられたと云ふのに、青森縣のエデンは、

五月も半ば過ぎて、未だ雪に閉されてゐるのは、これ如何に？ と物語つたら、物を知らぬのも程がある、と云つて笑はれた。

即ち、彼の十和田湖や駿河の富士山の爆發以前の昔には、即ちノアの大洪水の以前には、いや世界最古の文明國で、日本につながつてゐたに相違無いムと云ふ大國が、太平洋に陥没する以前には（これは米國のチャーチワード大佐の研究になる有名な著書に依る）この青森縣は勿論の事、樺太も西比利亞も、即ち今の寒い所一帯は、熱くて半裸體でないといふことがあつた事は、その當時地球の軸がまだ二十三度半傾かなかつたと云ふ事が、東西學者に依つて證明されてから確たる事實であると云ふ。その證據には、この迷ヶ平にも熱帯植物の一種であるシダ類が見出される。又十和田湖に登る八合目には有名な睡蓮が咲いてゐる。八戸の先には榕樹たんのきがある。樺太にも熱帯植物が見出される。シベリアの地中からマンモスの骨が発見された事があると同時に、七戸からも同じくその骨が出て來てゐる。又珊瑚樹もその附近の地中から掘り出されてゐる等々と太古の熱帯性に就いて、果しもなく種々の立證を聞かされたことである。

そして、このエデンの樂園としての立派な資格は、天下の大風景十和田湖を、林間に見渡すその雄大にして壯嚴、美にして快の極まる所、地球上これ程の立派なる所、良き所は又とあらうか

神話傳説にある所のエデンや天國は、實はこの迷ヶ平を指すのである、とかう皆さんから説明されたことである。

而して、更にこの附近にドコの森と云ふ所があつて、其所には一種異様な文字を刻みつけた所の文字石が、大にしては一間にも餘り、小にしては掌に持てる程の物が、幾十萬と數限り無く其所に積まれてある、と云つて、その一つを見せられた。その字體を見るのに、それは所謂神代文字の一種であつて、彼の西洋文明の源を爲した所のバビロンのその又源を爲す所のスメラ國の文字に頗る似通つてゐる事も不思議である。西洋の學者の云ふ所に依ると、このスメラ民族こそは、髪の毛黒く黄色で勇敢、團結心強く大弓を良くし、その當時最優秀の文化を持つたる驚く可き人種であつた。その類似を現世に需めるならば、日本人以外にはない、とかう云はれてゐるのである。

然も、その文字はその後を生れた猶太人のヘブライ族の用ひた文字や、古代印度のサンスクリット文字に頗る似通つた形を持つことは、實に不可思議千萬と云はねばならぬ。彼の平田篤胤翁や新井白石の述べてゐる我國の神代文字とは、將にこれを指すのではあるまいか？ さうすると高々二千年を越してゐないキリスト教の問題ではない、數萬年否數百萬年の太古の事に屬するや

うた。八戸附近の是川からは泥炭中に朱塗の弓が掘出され、十和田の麓のアイヌの石器のある土地數十尺下の火山灰の下からは、精巧な土器や金屬が発見された事は、最近の驚異とされてゐる所で、彼の日本最古の書物で、日本の歴史を書く時の基を爲したと云ふ「古事記」と、その最上一つの「日本書記」には、我國の始めは百七十數萬年以前と記されてあつたのを、明治初年の學者共が、こんな數字が出てゐては外國の學者に笑はれるからと云つて、活字本にする際右の本から百七十幾萬年云々は抹殺させることになつたのだ、と云ふ話しをふと思ひ出した。而して、米國のチャーチワード大佐計りではない、獨逸の學者等は、日本の歴史は、二千六百年所ではなからう、もつとく、古い太古からだらう、と云つてくれる事等を思ひ合はせて來ると、何となく不思議になつて來る。

平田篤胤先生等は、神字存在説を斷言してゐるが、今の學者は、日本の文字及び日本の文化は皆支那から頂戴したのだとさう思へど、國民に教へ込んでゐる事等と思ひ合はせると、頗る奇異なる、さつぱり割り切れない感情に囚はれざるを得なくなつたのだ。我國の太古史を檢討し直す必要が出て來たやうだ。日本人がぼんやりしてゐると、西洋の學者が手をつけるだらう。

盆踊りの唄と意味

キリストの墓のある戸來村の盆踊りの唄は、一種不可思議な物だと云ふ。それを記せば左の通りである。

ナーニヤード ヤラヨ
ナーニヤド ナア
サアレダー デサイ
ナーニヤード ヤラヨ

古來、この附近ではかうした唄の文句を唄ひながら踊るのである。然もこの文句が、何を意味するかを、誰も知らない。例の本尾宣長翁を散々惱ました長唄のトウトウタリ、ドウタリの文句と同様、これは、只何かの口調を移したものだらう位に思つて、誰も氣にも止めなかつた。然るに、同縣出身の川守田神學博士が、米國に居る間に、ふと子供の時から聞き馴れてゐるこの文句をヘブライ語で考へ合はせて見ると、何とこれは、立派に意味の解けるのに愕然としたと云ふ。その翻譯した文句を記すと、次のやうになる。

おん前に 聖名を賞め讃へん
おん前に 毛人を掃蕩して
おん前に 聖名を賞め讃へん

さて、かうなると、戸來村初めこの附近の住民の祖先は、いよくヘブライ人種即ち猶太民族といふ事になる。所が、この唄の文句に就いて、他所から文句が來た。

それは、例の西藏學者の河口慧海翁である、翁は人も知るやうに、西藏に長く行つてゐた日本人で最も深く西藏を知り、西藏語の分る人である。その人がこの文句は西藏語である、と云ひ出した。

河口師の説に依ると、この盆踊りの唄は、先づ次のやうな文句となる。川守田氏が聞いて記した物とは、大分違つて來てゐる。

ニヤーニヤードヤール
ニヤーニヤードーナサラ
ニヤーニヤードーヤール
ニヤーニヤードナサラ

ニヤニヤードヤラヨ
ニヤニヤードナサラダ
ヂヤヤヤサエ
ニヤニヤードーヤラヨ
ニヤニヤードナサラダ
ヂヤヤサエ

西蔵語に譯して、更にこれを日本語に譯すと次のやうになる。

ねに／＼行かう 配カ偶者である
ねに／＼行のは つれぢやもの
ねに／＼行かう つれだもの
ねに／＼行くのは つれ合ひぢや
こりやよい 折りがよい
ねに／＼行かう つれである
ねに／＼行くのは つれ合ひぢや

こりやよい 折がよい
ねに／＼行かう つれである
ねに／＼行くのは つれ合ひぢや
こりやよい 折りがよい

(青森市東奥日報所載)

この通り、歌の文句からして兩者は可なり差異をなしてゐると同時に、内容も甚しく違つてゐる。河口氏の解釋に依るものは、農作を唄ふ農民の楽しい生活の或一瞬間を唄つたものであらう。川守田氏の物は、もつと大きな社會生活全體を唄つてゐる。尙河口師は彼のトウトウタラリトウの文句を、矢張り豊作を壽ほいで、神の前で喜び合ふ意味だ、と先年發表されたことのある事を想ひ出す。

この二様の日本にある文句は、人に依り又は村内でもその個所に依り、家に依り、違ふのかも知れない。これは、益になつて、實際に唄ふのを聞いてみなくては、何方がどうとも云へない。私は只その機會を得られなかつたのを残念に思ふ次第である。世の専門家に、この御研究を任せるのが一番いゝやうに思ふ。

尙此所に一言す可きは、太古に於ける西蔵も亦ヘブライの國も、今日のやうに無關係の物では

なく、彼我往來も頻繁であつたし、第一、ヘブライの國等の中央亞細亞から極東に来る者は、大方道を西蔵路にとつたと云ふことである。現にキリストも東行の際に、西蔵を通つたやうに記されてあるやうだ。さうしてみると言語に双方類似點を持つことも十分考へに入れてよいやうに思へるのである。尙これらの事は、他の事と共に、専門の古代言語學の研究者に十分の調査を願ふ可きだと思ふ。

尙又現在戸來村に残る風俗習慣の内に、例へば結婚とか祭禮とかに於て、尙他のヘブライ人種即ち猶太民族のそれと類似性を持つ物があるかも知れないが、それらも、皆専門研究家に任す可き事であらう。

靈界から基督の聲

私は外國の新聞に出た事に依つて、キリストの渡來を先づ知り、次いで日本の新聞雜誌や叢書等によつて、キリストが來た事を知つたのであるが、現地に就いて聞いて見ると、キリストの渡來説は、約三十年程以前に、米國に於て表はされた「世界の驚き」と云ふ著書にその事が記してあるさうだ。次で、昭和十一年に、獨逸伯林に發行される獸醫學の機關雜誌に、キリストは年二

十一歳の折東方へ行く事を志し、西蔵シベリアを通過して、ベーリング海峡を渡つて北米に入り其所から南行して、遂にメキシコに入り、其所から引返して再び元の故郷猶太國に戻り、三十四歳から新しき教へを廣めて、遂に従來の猶太教を奉ずる者達から憎まれ、磔刑に處せられる事になつた時、弟が身代りとなつて兄キリストを逃がした。キリストは再び元通つた路を通つて、再びメキシコに赴かんとしたが、日本國に立より、其所で生を終つた、と記してあつたと云ふ。

この雜誌を手にして驚いたのは、今戸來村村長をしてゐる獸醫學士小坂甚一郎氏である。氏はその頃役人として長野縣に奉職してゐた。そして、自己の専門的の學業とは全く無關係のキリスト云々の記事に驚きを持つと同時に、餘りに事の無稽過ぎるので、一笑に附して忘れ去つてゐた。然るに、その後父親の死後家業を繼ぐ可く戸來村の郷里に戻つて來て、キリストの墓が、我家の直ぐ側に發見されて、村人の騒いでゐるのを見て、非常に驚いたと云ふ。

さうした記事の出た頃から少し後れて、當時陸軍參謀本部勤務の陸軍有數の猶太研究者安井仙弘大佐は、わざわざその墓所其他を見に來られ、そして、歸途今バスが辛うじて通つてゐる狭い國道を指して、やがては、この路がコンクリートを敷詰めた八間道路に變るだらうと、笑ひながら云つて歸られたとの事だつた。

それからやゝ後れて、哲學博士の小谷部全一郎と云ふ人が此所を訪ねたさうだ。この學者は、猶太民族に對する造詣が深いとかで、壺その他の出土器に對して、それらが猶太民族特有の物であるとの折紙をつけたさうだ。更にこの博士は、例の靈媒術を行ふことでも有名ださうだが、その折、精神を統一して、靈界からキリストを呼び出し、それと問答を行つたさうだ。それによると、左の通り興味深いものであつたと云ふ話した。

小谷部「貴方は、日本で妻を娶りましたか？」

キリスト「娶りました。私が四十二歳の時、名をゆみと云ふ二十歳の女を娶りました……私を非常に愛してくれました……」

小谷部「その女性は、何う云ふ身分の人でしたか？」

キリスト「決して卑しき者の娘ではありません。或立派な家柄の家の娘でした」

小谷部「日本では布教をなさいましたか？」

キリスト「いえ、少しも——」

小谷部「磔刑の時身替りを立てたのは、貴方の方から頼んだのですか？」

キリスト「否え、弟が進んで身替りとなつてくれました。私には未だ爲す可き事が澤山あるか

ら、何卒死なずにゐてくれろと云つて……然し、私は七日七夜泣き通しました……」

小谷部「子供さんがありましたか？」

キリスト「三人ありました。それは、皆女でした……」

靈媒に依る問答は、右のやうであつたさうである。靈魂の不滅を信する人には、この事が事實と思へるだろうし、然うでない人には、夢物語りとかそれぬであらう。

尙小坂戸來村々長の話しに依ると、同氏が子供の頃、今のキリストの墓のある、その當時は只笹と雜木との茂つてゐた、その丘の上に友達と遊びに行く、たま／＼この笹原の所にゐた澤口翁が、子供達に向つて、此所に入つては不可い、と非道く叱りつけたさうだ（元よりその土地は澤口家の私有地である）そして、「俺はお前等とは、種が違ふのだ！」と、いたけ高になつて、くり返し／＼述べてゐたと云ふ。小坂氏は子供ながらも「種が違ふ等と、親父太いことを云ふ」と思つたこのことであつた。だからして、澤口家の者は、開けると目の潰れると云ふ箱の事もあつたが、何か代々云ひ傳へに従つて、普通人とは違つてゐるのだ、と云ふ意識を持つてゐるのに相違ない。然し、件の老人は勿論の事、當主三次郎氏もその妻女もまた幼い五人の子供達も、村人とは餘り親しく口を利かず交際もせぬから、その家に何があるのかは一切分らぬと云ふのである

尙澤日本家の人々は勿論の事、二軒の分家の人達も、昔は朝に夕に墓所に行つて、普通の日本人の行はぬやうな合掌法をして、墓の方を拜んでゐる姿を屢々見受けたが、數年前からキリスト云々の問題が起きてからは、その禮拜を餘り行はぬやうになつたし、行つてゐても、村人が其所に來たと知るや、急いで廢して了ふやうになつた、と矢張り小坂村長は説明してくれたのであつた。

更に昨年、印度に於て、キリストの自畫像とその下に自己の名を日本の神代文字のやうな書体で書き記した物が發見されたと云つて、それが、外人の手で或雜誌に掲げられた物の寫しを見た。キリストが、日本の神道を學んだ後に、印度に立寄つて佛教をも研究して、そして、ナザレの里に歸つたのだらうとの説があつた。尙キリストが何の爲にメキシコに行つたのかは分らぬがメキシコはムの國を通じて日本と深い關係を持つてゐた事は、彼の没滅したインカ帝國の遺物や日本のワラヂ、ミノ等と同じ語が現在使はれてゐるのでも、十分知る事が出來やう。

キリストが日本に初めて來たのは、本朝 垂仁天皇の御代に丹後の宮津附近に上陸して、其所から大和の國に赴き、其所で 天皇のお許しを得て、種々勉學して歸國の途に就いたのだと云ふ。そして、磔刑を免れて後は母と弟との遺髪を携へ、二人の弟子を卒ひて日本に渡り、其所で

何等説教はせず、全國を行脚して治病等の社會事業的の事を行ひ、そして百六歳で陸奥の戸來で大往生を遂げたと云ふことである。尙キリストは、日本に來てからは、八戸太郎と名乗つてゐたとの説である。又今日の行者山伏の行法とキリストのそれとは何等か類似點を持つやうだ、この話しも聞かされた。今日石と名のつき、石の字の附いた社の研究から、何物か得られる筈だとも聞かされた。

事の眞偽に就いて

種々の傳説とその傍證らしき物もあるが、とに角もつと正確なる研究調査を専門家の手で行つてからその眞偽を断定す可きであると思ふ。或人がキリストの墓に二十呎程の鐵棒を密かに刺して見たさうだ。所が、周圍に堅い石が取圍んでゐる事だけは知り得たと云ふ。その十來とか、十代とかは、何の意味か？ 昨年アメリカから來た女流教育家達が青森に赴いた際、當時の小河縣知事は、戸來村にキリストの墓と稱せられる物があるからと物語つたので、彼女等はこれを見物して歸り、更に全米の新聞紙に大々的にその墓の事が發表されたので、外人達の好奇心と研究心をいやはが上にも煽り立て、續々視察調査に外人團が來朝すると云ふ前振れが來てゐるやう

だ。

さて、この事柄が青森縣の新聞紙に表はれた時、第一番にこれに對して反對を稱へたのは、青森縣八戸市史編纂係の上杉俊夫氏で、キリスト教は仙臺から弘前に入り、それから青森縣下に廣まつたもので、八戸にある祠は、嘉永年間に出來たバタ臭い物である。キリストが日本で昇天云々等は信じられぬと、簡単に片づけてしまつた。

青森市の日本キリスト教宣教師のノツス氏は、まだ十分に信する事は出來ないが、陸奥國に歐洲文明の渡來した事は事實で、ポーランドで最近發見された三千年前の家屋と同一物が秋田縣横手、大曲附近で發見された。又八百年前にアラビア人が日本海を渡つて、十三瀉に上陸した文献がある。又南部黒石町にある古城は、西洋の築城法に依つたものである。又南部方面にヘブライ語に似た言葉のあるのは確實である。だから、キリストが來ない時でも、彼の國の人が來た事に間違ひはない、と述べてゐる。

更に青森縣三本木町にある新渡戸文庫を預つてゐる太田と云ふ海軍少佐は、昔地中海警備の際ローマ法王廳にある、キリストを死刑に處した當時の猶太國の總督ピラトの判決文の寫しと云ふのを手に入れて持ち歸つてある、と云ふことである。その文面に依ると、ピラトはキリストを如

何にかして救はうとした跡が歴然と知れると云ふ話である。然し、右の太田少佐は、目下青島にあるので、その書を見る機會は得られなかつた。

更に又昔ギリシヤに、キリストが磔刑を遁れて東方に去つた事を記した文献があつたが、その寫しは今獨逸にある筈だ、この話しも聞かされた。

この問題の解決は？

事の眞偽は、これを後日の専門的研究に任せるとして、とに角、ヘブライ人達が日本に渡來して、皇恩に浴し、全然日本人化して、その子孫が安穩に生活出來て、今日に至つた事は、否まれぬ事實である。日本の北邊計りではない、中央政府であつた奈良京都に猶太民族が來住歸化して殖産工業及び藝術方面に於て、我國文化を大に扶けた事は、歴史に明記されてゐる所である。だから、猶太族が陸奥に居住して、時代の潮流が穩かなるが爲に、古代の習慣をそのまゝ今日に残してゐる事に少しの不思議もないことである。

然も、キリスト及びその一黨が果して日本に來たとすれば、精神的にも物質的にも腐敗墮落しきつた一般猶太人から排斥された非猶太的の人間共であつた事はたしかである。清くして正しい

生活の送れる土地を求めて日本に來住したものだと思ふ事が出来るのである。だから、今日の問題となつてゐる英國及びロシアを繰つて、世界人類を塗炭の苦しみに陥れてゐる現在の猶太人の仲間とは、全然別個の物である。だから戸來村附近の猶太の子孫達は、日本化したと云ふよりは元々猶太を嫌つて、猶太の國を永遠に立去つた亡命者の子孫達である事を、十分に考へる必要がある。然も、現在の猶太人にも數種類あつて、日本及び國家主義に立脚してゐる國々を亡ぼさうとたくらんでゐる猶太人と、さうでないのことがある筈である。善良なる意志を持つて、親善を希つてゐる猶太人に對しては、全然別個の考慮を拂ふ必要のある今日、猶太民族と云ふ名をもつて一概にこれを仇敵視する事は、決して策の得たものではないと云へやうと思ふ。

更にそれよりも問題なのは、キリストが、若き頃何故に日本にはるゝ來たか、と云ふ問題、並に弟が身替りに立つたからとて、聖者にはあるまじき卑怯な眞似をして迄再び日本に渡來して餘生を送つたと云ふその事である。

前にも述べたやうに、太古の日本國は、驚く可き文化を持つており、全世界に文字の無かつた時、日本のみがそれを幾種類をも持つており、モーゼの如きも我國に於て彼の十戒文を作つて、それを彼の國に持ち歸つて、當時また蠻族であつた歐洲人達を教化したのだ、と傳へられ、大和

民族の血を引く釋迦は、皇道精神を基として佛教を編み出したと傳へられる今日、若きキリストが日本に來て修學したと云ふ事は、當然有り得べき事と考へられるのである。又十字架を免れて日本に再渡來した事は、普通の基督教信者には理解し得られない重大な意義を持つものである。即ち、それは、キリストが餘生を日本の社會事業に盡したのである。すめらぎの道を眞に身をもつて表現したものと云へるのである。

かうした崇高にして深遠なる、日本の皇道精神と云ふ物を、我が太古の文化を闡明することに依つて、これを單なる觀念論や抽象的議論としてなく、現實の事實として、明確なる證明を附して、これを宙外に表明す可きである。それによつて、初めて八紘一字の精神も明瞭になるだらうし、國體を明徴にし、神國日本の眞精神を全世界に知らしめることが出来るであらう。

十數年前に、例の碩學アインスタインが日本に來て、歡迎會の席上で世界の文化は日本が本源である。而して、將來世界の文化を握るものも亦日本である、と云つたので、列席の日本人は、お世辭も此所まで云つては、と大嘲笑をしたと云ふことである。而うして笑つた人々は、今でもまだ日本人は、永久に西洋人や支那人の文明を有難く頂戴してゐなければならん、と思つてゐるのだらうか？

大昔漢文字と共に、凡ゆる文化は、皆支那から来たものと思つてゐる人々は、彼の易や天文學や文字の源も、皆日本から外國に渡つて行つたのだと知つたら定めし驚くことであらう。易は我國の皇道精神を最も理論的に説明したものである。然し皇道無くやうやく王道しかない支那の國では、易の眞意を會得出來ずに今日に及んでゐる。八卦十二卦でなく十六卦を置く事は、支那人には出來ぬさうだ。十二支は十二の神々を祭つたのだが、支那には神が無いために、十二の動物に置き換へた、と云ふやうな事は、今旺んに神道家達に依つて研究され出した事柄である。

秦の始皇に依つて焼き亡ばされた書籍の内、生き残つた書物が今事變に依つて發見されつゝあるやうだ。是等の書物に依つて、日本古代の文化が直接間接に説明されかけて來てゐると云ふ事は、何と愉快な話しては無らうか？ かくて、支那古代の文化が皆我神代文化を移植した物である事が證明された時、日支關係は何う變化するであらうか？ 更に遠く中央亞細亞及び西歐に、日本の神代文化が太古の時代に渡つて行つた事が知れ渡つた時、日本に對する外國人の認識はどう變つて行く事であらうか？ 我が皇道精神すめらぎの道と云ふ物も、さうした科學的の實證を俟つて、初めて完全に外國人に理解され、讃仰される事になるのではあるまいか？ かうした意味から、キリストの渡來説並にそれを中心としての古代に於ける日本の文化を闡明

させる事が、目下の事局に對して、最も肝要且つ急務であると思考されるのである。

四六版函入美麗裝幀四〇〇頁を越ゆる文獻

山根菊子著

定價 貳圓五拾錢
送料拾五錢

光は東方より

キリスト、モーゼ、釋迦等が日本來朝に
關する詳細なる研究の發表

特別取扱所

銀座書房

東京市麹町區九段四丁目十五
電話九段(33)三一七二番
振替口座東京五七七六番

るあゝつめしせ異驚を界世

390
238

機械工業界ノ寵兒
仕上不要ノ高級鑄物

飛行機・自動車・寫眞機・双眼鏡・蓄音器
タイプライター・電氣機械・瓦斯水量器・煽風機
人絹機械・製絲機械・紡織機械・家庭用品・其他

蒲田ダイカスト株式会社

本社 東京市日本橋區室町三丁目一不動ビル
電話 日本橋 (24) 一〇三三九 六六四

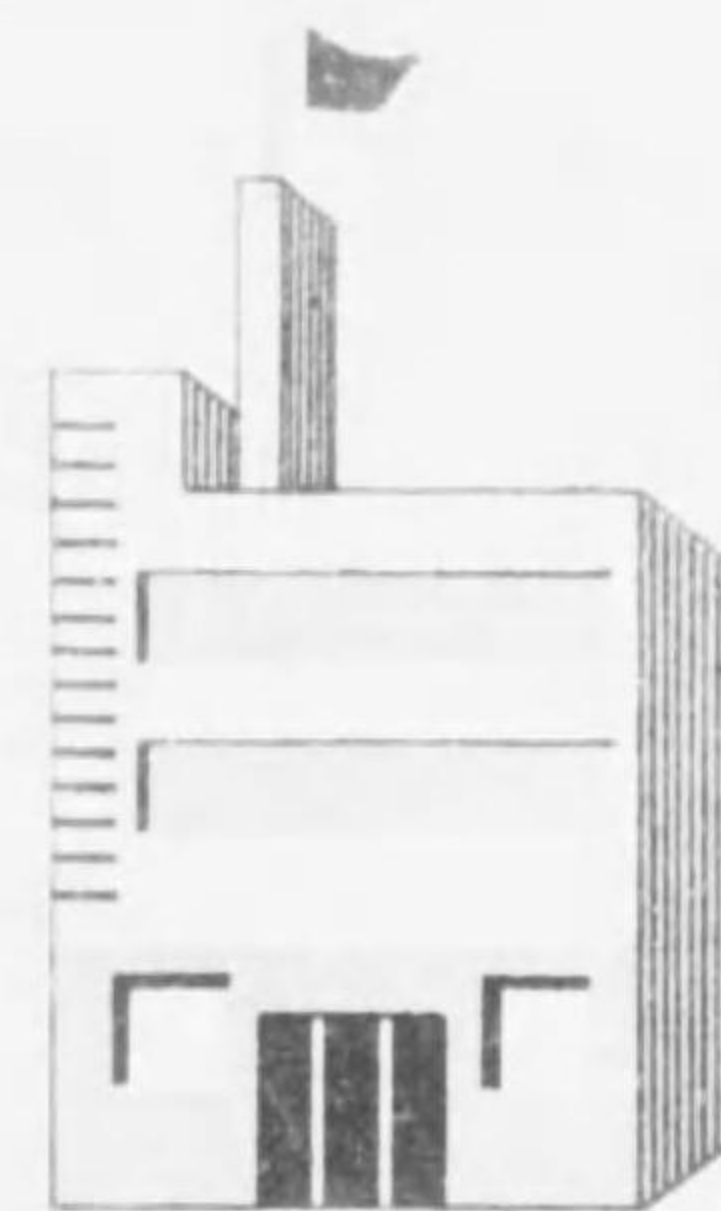
銀座書房の既刊パンフレット

(定價各冊十錢)

從軍記者 噫！忠烈加納部隊(絶版)
伊藤實著
東條清一著 防共護國團事件
北條清一著 少年航空兵
著者 時局を動かす人々
大村毅著 國家總動員法解説
横山五市著 厚生省とは何をするか
日大教一著 全體主義的日本精神論
世耕弘一著 世界の爆撃機
前法制局參事官 厚生の何をするか
種貝三著 全體主義的日本精神論
商學博士 世界の爆撃機
武田一著 新政黨の胎動
リバン爆撃隊員 世界の爆撃機
野口昂著 新政黨の胎動
讀賣記者 世界の爆撃機
村田致郎著 新政黨の胎動
政治記者 新政黨の胎動
阿武隈次郎著 新政黨の胎動
一等操縦士 新政黨の胎動
野口昂著 新政黨の胎動
東方會總裁 日本國民に訴ふ(十五錢)
中野正剛著 除州陥落とその後に來るもの
讀賣東亞部長 除州陥落とその後に來るもの
村田致郎著 除州陥落とその後に來るもの
商工參事官 除州陥落とその後に來るもの
佐藤謙之助著 除州陥落とその後に來るもの
小心理學者 生活危機の心構へ
小菅一男著 生活危機の心構へ

キリストは日本人なり？
その遺跡を探る(奥附)
『不許複製』
著者 仲木貞一
發行者 大木喜仲
東京市麹町區九段四丁目十五
印刷者 星野忠作
東京市芝區豊洲一ノ一五
印刷所 スター印刷株式會社
東京市芝區豊洲一ノ一五
電話芝(43)一三三〇番
「定價拾錢」送料參錢
昭和十四年六月廿八日印刷納本
昭和十四年七月五日發行
東京市麹町區九段四丁目一五
發行所 銀座書房
電話九段(33)三二七二番
振替東京五七七六番

日曜九時半
平日十時半
開場（各階二〇センチ）

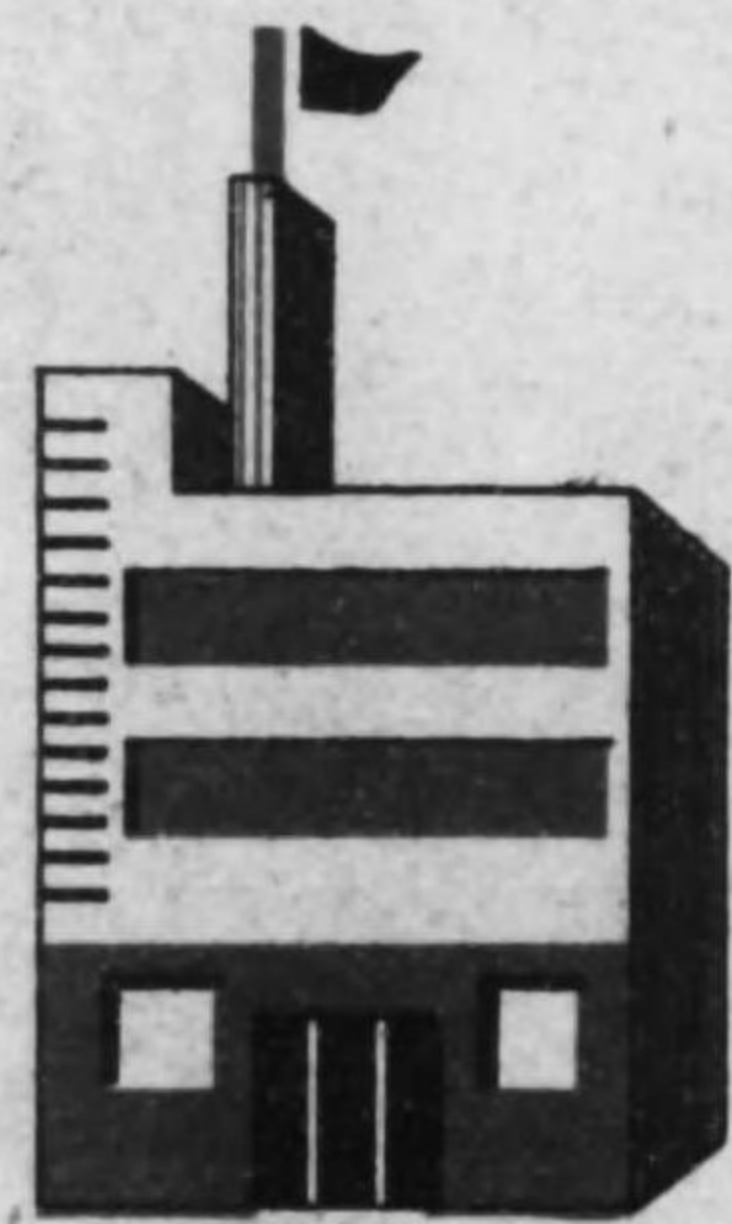


るせ見を画名いし樂もつい

新宿
伊勢丹交又點
帝都座橫
太陽太
座

日曜九時半
平日十時半

開場(各階二〇セン均一)



ついても楽しむ名画を見せる

新宿

伊勢丹交又點
帝都座横

大陽座

終